

會



報

1958年8月

198, 199

日本山岳會

ヒマルチュ
リ登山計画

日高信六郎

日本山岳會はさきに一九五二年マナスル登山を計画し、毎日新聞社はじめ関係官民各方面の多大なる御援助のもとに、つぎつぎと各般の困難を克服して、一九五六年遂に登頂の目的を達したのであるが、本会としては、これまでに得たヒマラヤ登山の知識と経験とをいかし、さらにかの地の高峯に登山隊を送つて、本邦登山界のために尽したいと考えていた。會員の間にもよりよい計画をねる向きが一、二に止まらなかつた。

たまたま昨年十一月本會員を中心とする日本大学山岳部から、その計画にかかるヒマルチュリ登山の案を無条件で本會に移譲し度いとの出があつた。

よつて十二月の理事会で検討の末、資金、外貨、登山許可などの点について見通しをつけた上で、正式に決定することになった。まず従来縁故の深い毎日新聞社に後援を懇請したところ、同社において慎重審議の結果、三月下旬受諾の確答に接した。他方外務省を通じてネパール政府に登山許可を申請し、海外出張の途次四月上旬カトマンズを訪れた別宮會長からも、直接先方に申入れたところ、同政府は極めて好意的な態度を示すに英、ニュージーランド、オース

ストリア等から、今年にわたつて登山許可申請が出ておつたにもかかわらず、三月十一日日本隊の登山を許可する旨の決定がなされた。外貨については、後記の経緯を経たのち、三月下旬に至つて本會の登山隊所要外貨のメドがついた。

そこで四月八日海外登山審議委員會（會報第一九四号参照）に諮つた上、九日臨時役員総会に報告審議の結果、本會としてヒマルチュリ登山隊を出すことに決定し、十八日にはヒマラヤ委員會以来ヒマラヤ登山の世話に当られた各委員に報告意見を求めた上、十九日の會員總會席上右の次第を報告した。毎日新聞社は翌二十日の紙上に本會の計画を後援する旨の社告をのせ、その他の各紙もこれについて記事を掲げた。

海外登山に要する外貨の割当てについては、本年度からは原則として体協を通じ、スポーツの枠内で申請することになったので、昨年十一月本會の計画と併せて、京都大学及び慶応大学から申出があつたカラコルムとアンナプルナⅡの分を申請したのである。ところが大蔵省で査定の結果、外貨の枠は約三分の一に圧縮されるといふので、大難関に達著したが、京大の計画は関係諸氏の努力によつて、一般外貨から賄つてもらえることになり、慶応の方は来年度の外貨を引当てることにより、三つの計画とも予定通り実現の見通しがついたことは、御同慶の至りである。

本會がこの際敢てヒマルチュリ登山計画を取り上げたゆえんは、

①ヒマラヤの八千米級はもろにそれに近い高度の諸峯は大部分既に登られたか、または現在各国登山隊の目標となつており、七八六四米のヒマルチュリは残された唯一の高峯といつても過言でないこと。

②マナスル山群に属するこの山について、日本山岳會としては、今西踏査隊以来数次の登山隊によつて觀察され、殊に一九五四年堀田隊は東麓チュリン・コラの谷にわけ入つて踏査しており、わが方にとつて親しみ深く、かつ大体的見当もつていけること。

③今回の登山に伴つて各種の調査を行うことに依り、従来のマナスル山群の調査を完成したいこと。特に先遣隊の越年が実現すれば、今まで未知のままのこされていた冬期のヒマラヤにおける降雪量の変化や気象状況などを確認することが出来て、わが国の気象観測上の盲点を埋める有益な結果が期待されること。

④今日の段階においては、なるべく広い基盤からピックアップした登山隊をヒマラヤに送り出すことが、本邦登山界のために望ましいことである。

これから本格的に登山計画のねり上げに当るのであるが、まず今年度選出の新理事会最初の会合（四月二十五日）を経て、五月七日海外登山審議委員會を開き、隊長決定の方法を議した結果、日高松方両副會長と棋名譽會員の三名に決定を一任された。依て右三名は早速隊長の選考に取りかかり、同下慎重協議中である。しかると

この登山の準備は至急に取り進める必要に迫られておるので、取りあえず①ヒマルチュリ登山委員會をつくり②日高副會長を委員長、小原評議員を副委員長とし、委員を選び準備作業の進捗にあたらせ③隊員の選考等重要な人事は別宮會長、松方副會長及び棋名譽會員と協議の上決定することとして、海外登山審議委員會及び理事會の了承を得、ここに大きく準備作業の歩をふみ出す体勢が整つたのである。

今度の登山に当つては、従来の経験をいかして、準備段階においてもなるべく本來の機能の妨げにならないように、隊員が主としてこれに當るようになり、パティも出来るかぎり簡素賢実を旨として、人員を極度にしぼり、なるべく広い基盤に立つて、ヒマラヤの経験者若手とを適当に配し、経費を出るだけ切りつめた上、隊員各自も応分の負担をする建前で行き度い所存である。

今後の進展に依り、会報を通じて會員各位に御報告を怠らなかつてもりであるが、何しろむづかしい山として知られている相手であるだけに、あらゆる面において全會員各位の心からなる御協力なくしては成果を挙げることは期せられないのであるから、倍旧の御支援を切に御願ひ致す次第である。

先遣隊歓送会

ヒマルチュリ先遣隊金坂一郎石坂昭二両氏の歓送会は七月十五日午後六時から協和會館で開きその壮途を祝した。両氏は七月二十日神戸からサンゴラ号で出帆。

ヒマルチュリ偵 察行を前にして

金坂 一郎

ヒマルチュリはいまさら書きた
るまでもなく、マナスル南方に
峰つぎの七八六四米峰である。
その名称は「錐の峰」を意味する
とかで、P二九を含めてマナスル
三山を形成する。いまでこそマナ
スルは日本隊の数回の遠征により
著名になつてゐるが、当時カトマ
ンズあたりではヒマルチュリは知
つていても、マナスルを知らない
人がほとんどだつたそうである。
写真で見ても立派な山だ。またそ
れだけに登るとなると大変だろ
う。難しさはマナスル以上とい
うのが大方の定評である。

マルシャンディ側から頂上に至
る南西稜バラハポカリ・レクはム
シ・コアラとドルディ・コアラを
分かつ。この尾根はティルマンが
早くも一九五〇年に試登をなし、
五〇〇〇米近くまで達した。その
後一九五四年アフリカのケニヤ隊
が再びこの尾根にとりつき、約六
〇〇〇米に達したが、事故によつ
て隊員一名を失つた。このときの
報告によると、最高到達点より先
のルートは絶望的な悪い尾根であ
ると。

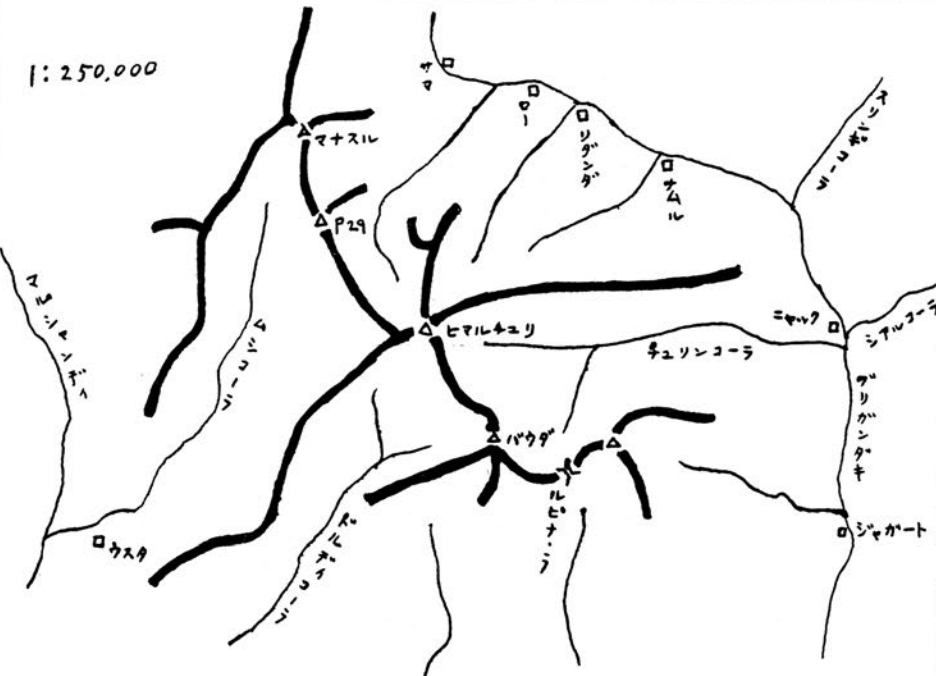
北西稜はP二九、マナスルに続

くもので、頂上の近くで南西稜に
合する。南稜はパウダ・ピークを
経てルピナ・コアラに至り、その東面
にチュリン・コアラが東稜との間
に入つてゐる。一九五四年サマ事
件からガネッシュに転進した第二
次マナスル隊の一部が帰途ニャッ
クからこの谷に入り、ルピナを越

えてゐる。ヒマルチュリ、パウダ
・ピークをねらつた英国のスタイ
リス等につたのはこのときのこ
とである。チュリン・コアラより
のルートも絶望に近いとされてい
る。

結局、いまのところ可能性が考
えられるのは、東稜と北稜の間だ
けである。これとても見込みがあ
るといふのではなく、いまだに知
られていないから調べて見よう
というにすぎない。私たち先遣隊の
任務も、この北東面の谷々を偵察
しようといふのである。

まで登れる望みが少い。
われわれの計画は七月二十日神
戸出帆の英国船サンゴラ号でカル
カットに八月十三日頃到着、陸路
パトナに至り、ここからカトマ
ンズに飛ぶ。以下マナスル・コマン
ズに従つてニャックに九月上旬に着
く。この頃まだモンズンが残つ
てゐるのではないかと推定される
が、ことに今年カルカットでモン
ズンの到来が平年より二週間も
遅いとのこと、いい偵察日和は望
む方が無理かも知れない。これか
ら先の行動は天候とにらみ合わせ
て決めることなのであるが、一応
ラルキヤ、ポカラを経て十月末に
カトマンズ帰着。状況によつて
は往路ブリガンダキを戻るように
なるかも知れないが、帰国の船便
に合わせて、十月末日くらいまで
にはカトマンズに戻ることにな
る。帰国は十二月上旬横浜入港と
いうことになる。



話と総合すると、東稜の上部、約
七〇〇〇米くらいのところにとり
つければ、それから上はかなり激
しいクライミングが予想されない
でもないが、コンディションに恵
まれれば、やつてやれないことも
なさそうである。いま東稜の上部
にとりつくといふことを書いた
が、これは東稜そのものが長大
(ニャックから頂上まで直線二五
キロ)で、しかも七〇〇〇米に近
いところに通過不可能な大きなギ
ャップがあるらしい。そしてチュ
リン・コアラ面は大体において激
しく切りたつてゐる。ところが東
稜の北側は南側に反してかなりゆ
るい斜面になつてゐるのではない
かと想像されるふしがあるのだ。
だから今度の先遣隊はそのあたり
に希望をかけて出発するのである
が、ヒマルチュリの北東面の谷は、
サマに通じる街道からはほとんど
その様子が見えかねない。ひよ
つとしたらポーターなど全くつれ
て入れないほどの悪い谷かも知れ
ない。地図にはまことしやかに何
本も尾根や谷の記号が入つてゐる
が、本当のところは実際に足で歩
いて、眼で見てくるより手がない
のである。ブリガンダキの対岸の
山から眺められれば問題は割に簡
単に解決するかなと思われるが、ブ
リガンダキの対岸は一般に峻しく
切りたつてゐて、余り高いところ

装備は新しく買ったものは鍋釜
のたぐいだけで、テントからロー
プに至るまでほとんどマナスル隊
のお古である。テントの布地もか
なりくたびれてゐるから、余り風
の強いところにはキャンブを進め
ることはできないが、幸いにして
見込みのありそうなルートを発見
できれば、なるべく七〇〇〇米近
くまで試登したいとは考へてゐ
る。モンズンの東風が秋の西風
に変わる間隙をねらつて、軽装備の
機動力を発揮できれば幸いである
マナスルにかよつた人たちは、
道すがらたびたびヒマルチュリの
威容に接し、何時の日にかと思つ
ていたに違いない。一九五四年の
第二次マナスル隊が出発の折、こ

れで多分マナルスの仕事は終るだろうと考えた私は、次の目標として小遠征隊にとつて適当な山を探がしてほしいと仲間頼んだ。こうしてわれわれの次の目標となつたのが、このヒマルチュリである。いま私は仲間たちのために登路を発見しようとしてこの山に向かうことになった。いささか感慨にたえない。

高頭さんと私

高野 鷹蔵

楨君(有恒)が、「あれは峯の兎に御馳走するためだ」と陸口をいつたというのを誰れか告げたのは何時のことだったか。

判らない話でしよう。これはこうなです。高頭君と小島君と私とで神河内から槍、鎌尾根、黒岳、鷲羽、薬師を経て有峯から船津へ、嘉門治等をつれて歩いた時に、醤油を煮つめて、一升樽につめて、樽のまわりを縄でギリ／＼巻きにして、岩肌につかつかつても壊れぬようにして、「シヨイコ」の端にぶらさげて持った大事な大事な当時の登山食糧の一つだ。それを来ない、鎌尾根で、大休止の際樽の底を岩角にぶつけて、まんまと、底を抜いてしまった。その後を模

書いている机の前では、ヒゲぼうで眼ばかりギョギョさせながら石坂が、今日梱包した荷物のリストを整理している。たとえ二名という小さな隊であつても、これを海外に送り出すためには一通りの面倒な手続きを踏まなければならない。こういう仕事に慣れない両名のこと、もうより経験者におすがり申してたど右往左往しているだけのことなのだが、以前に団体登山の技術委員長を拝命した経験が大いにものをいつているような気がする。具体的には大抵の面倒なことには驚かなくなつて

君が通り過ぎて、連中こんな贅沢をしていると、一寸悪口をいつたわけなんです。

本当のことをいうと、醤油煮詰案を出したのは私で、これを本気で実行したのは高頭君なんです。こともあろうに、この兎に献した醤油は亀甲万印を、わざ／＼当時、今の上野の松阪屋百貨店の所にあつた、老舗の割烹「伊予紋」の板前に命じて、作らせたというのですから念が入り過ぎています。この伊予紋という料理屋は、小説「鶴八鶴次郎」のモデルとかいわれていて、われわれ老人級の人間には思い出深いものである。

高頭君という人は、やり出すとこんなように実行力のある人で、その頃陸軍の松下げ品で、醤油を煮詰めた「醤油エキス」なるものがあり、その不味さを手焼いた話から、とう／＼高頭君の実行となつたわけだ。

山岳会を創めた頃から、何か新しい計画が出ると御国弁で「ヤリ

いるというだけのことなのだが、当時おちかづきになった先輩、知友諸氏の御指導や激励も大きな力になつてゐる。私にとつては山登りの国内問題と海外登山とが完全に密着しているのである。

ここ数年来私にとつて日本の山のスケールが非常に小さいように思われ出した。これはまことに生意気ないくさである。もとより小さな山には小さな山のよきがある。しかし大きな山を見たい、登つて見たいという気持はだんだんに強くなつてくる。いま私はその大きな山に接するために出発しよ

ヤシヨウテ」と賛成する、何か他の人に頼んで見る案が出ると、頼んで承知されなくても、元々だから、頼んで見る、とあらゆることに積極的である。こと山岳会のこととなつて何んでもこうである。

といつて私事については、頗る懸念である。山岳会を創めた頃は、私達は学生であつたが、高頭君のこのお尻を叩くような激励には、尻込みなどはしていられたくなる。だから当時の山岳会は、その頃の先覚者や学者に対して何の躊躇もしたく働かなくてどう／＼と活動したものである。

志賀重昂先生といへば、当時の名士であり大学で、登山界の大先覚者であるにもかかわらず、山岳会としては電話一本で、何処へでも講演に行つてくれた。「先生御礼はあげられませんが、行つて下さい」というと「よし／＼」と快諾してくれた。今考えてもわれわれ当時の若僧のいうことをよく聞いてくれたものと、今更らに考

うとして準備している。海外登山の場合には、登山そのものよりもそれに附随した面倒な問題が山ほどあるが、そうした煩雑さに直面しながら、私はヒマラヤに行くことに何の重苦しさも感じていない。かつてないほど軽快な気分で行事を進めている。これは、JAC に関するとしても、また職業諸氏に後継のことは引受けるから気安く行つていこうといつて下さったことが原因しているかと思う。この話を或る先輩にしたところ、それはお前の自信だといわれた。そこで

えさせられている。これも一つには山岳会なるものが、元々純粋なものであり、何の功利心も抱くものでないといつていたからであるが、当時地方の一豪族としての高頭君の思が、遍くこれらの山の先達、学究にまで及んでいたのであり、高頭君の「日本山嶽志」を通覧されれば自ずから、うなづかれるであらう。

高頭君との私交上のことでは、お酒を飲む程に酔う程に、何時もお叱られることの多いである。というは素面の時は頗るインギン丁重な言動であるが、御酒につれて、地方の豪族としての地肌が露程して来る。といつて何も叱られるわけではないが、どし／＼と何事にも激励して来る。これには亡くなつた小島君(久太)もほと／＼閉口して、「高頭君もいいが、叶わん」と逃げたものだ。もつとも小島君は殆んど酒が飲めぬのであるが。

山岳会五十年祭の時には私は述べたが、創立当時の高頭君の経済上の後援、また、今ここに書いた蔭にあつての積極策等がなかつたら、会としてその若芽を延びたことは出来なかつたであらう。高頭君としては決して第一線に立つた山のためには決してくれたというのではないが、この蔭での努力は山岳会五十年の基礎となつたものである。同君は病で会の五十年の集りには出られなかつたが、恐らく病床で感慨無量のものであつたであらう。

私はハツとした。こうしたさわやかな気分が山に向かえることはまことに幸だが、ひよつとしてうぬぼれ過剰から事故でもおこしはしまいか。この点だけが気がかりである。思ひ上がつた背伸びしたような行動は厳につつしむ、大いに戒心して与えられた任務を達成しよう／＼祈つてゐる。

最後に、何もできない、また何も知らない私たちがとも角も出発できるようにお骨折下さつたヒマラヤ登山準備委員会を始めとして各界の先輩諸氏に衷心から感謝の意を表明して筆をおきたい。

私は戦後、とう／＼会わずにまにに御別れしたわけである。あの酒客でよく八十才まで長命したといえるのでしよう。

わしの家に来るなら、雪のある時に来いというので、或年の冬に訪ねたことがある。踏み固めた雪の中を、行き交う村人達は、道のわきによつて、腰の辺まで雪の中につかつかつて、私達を通してくれる。都会人の私には村人達に対し気の

(十二頁へつづく)

極地法登山による

笠ガ岳から奥穂高

慶応義塾山岳部

昭和三十一年度の冬山合宿は十二月六日から二十五日間、部員二十六名で北ア笠ガ岳より槍ヶ岳を経て奥穂高を最終目標とするルートに極地法訓練を展開し、二十八日神岡に下山し予定通りの計画を完了することが出来た。この計画は北穂高遭難(昭和三十年五月)以後地道な再建の途上を歩んだ部が、ここ三年間の総決算の意味で実施したものであるが、極地法は部においては昭和二十七年冬以来久しく採用されなかったが、極地法に対して上級部員が未経験な登山形式として興味を持ち、極地法を体験することに極めて意欲的であつたこと、またさらに記録的に未だ勉強の余地を残すところを登攀対象に選ぶという条件を加えて、最初、北鎌尾根末端—奥穂高、笠ガ岳—奥穂高の二つの積雪期未踏破ルートを対象として考慮した。しかし下級生部員の冬山訓練にウエイトを移行して、より多くの新人をメンバーの中に包容することを主眼として、新人収容可能性があり、かつまた新人を包容した場合の隊の機動性を十二分に考慮して、計画の前半において地形的な条件の良い、笠ガ岳—奥穂高が冬山計画として立案されたわけである。

計画実施に先立ち十月下旬より偵察を開始、笠ガ岳頂上への登路と選定した蒲田谷側クリヤ谷(笠ガ岳夏路)の安全ルートの確保と雪崩対策に力を入れ、クリヤ谷、穴毛谷間の無名尾根を冬期ルートに決め、更に高差約二〇〇〇米に及ぶ笠ガ岳頂上に至るポイントとしてB・Cを最高限に引上げることにし、十一月月上旬クリヤ平(二八〇〇米地点「俗称II」)に食糧、道具、燃料、計約二百貫を荷揚げした。

かくして開始されたわれわれの行動は高山市より神岡を経て槍見温泉をB・H、前記クリヤ平にB・C、笠ガ岳、錫杖間稜線(二四〇〇米突)にC1、笠ガ岳頂上に中継、抜戸岳附近にC2、横沢岳前峯にC3、西鎌尾根千丈沢乗越にC4、南岳にC5、北穂高北峯にC6(雪洞)を設置して、アタック隊員二名が、奥穂高を往復し、撤収を完了して計画を完成した次第である。

〔記録概況〕

十二月七日、快晴、全員二十六名、B・H集結。八日、曇後雪、積雪少なく笠ガ岳の稜路つたいにクリヤ平に至り、一八〇〇米の平坦地にB・C(ビニロン製十二人用)設置。九日、風雪、吹雪をついて笠ガ岳、錫杖岳間稜線上(二四〇〇米)にC1(ミッド型八人用)建設。十日、快晴、笠ガ岳頂上に中継キャンプを設置、ラッセル多く、ワカンとアイゼンを併用す。十一日、快晴、笠の稜線は予想外の積雪があり、ラッセルに苦心、抜戸岳前峯(二七五〇米)にC2(ミッド型ビニロン製五人用)を設置。十二日、曇、強風。抜戸岳を越え、横沢岳前峯にC3(ミッド型ビニロン五人用)を建設。

十三、十四日、風雪停滯。B・C↑C1ルートは冬路に変更、31、B・C隊員は荷揚げを続行。十五日、晴、横沢岳を経て西鎌尾根千丈沢乗越にC4(ミッド型ナイロン四人用)設置。十六日、快晴、強風。槍ヶ岳、錫杖岳登頂、南岳、中岳のコールにC5(ブロード製マナスル二人用)及び雪洞(二人用)を建設。十七日、曇、雪。クレート通過、北穂高北峯にC6(二人用雪洞)を設置しB・C(三名)、C1(八名)、C2(四名)、C3(四名)、C4(三名)、C5(二名)、C6(二名)の最終配置完了。十八、九、二十、二十一日、風雪停滯。二十二日、曇、アタック隊員八、八、八、八、八、八の二名で奥穂高往復。二十三日、風雪停滯。二十四日、晴、C4、C5撤収。二十五日、風雪、C4、C3撤収。二十六日、風雪、C2、C1撤収、全員B・C集結。二十七日、晴、B・C撤収しB・H集結。二十八日、晴、神岡に下山。

(メンバー構成) 四年五名、三年九名、二年五名、一年七名、計二十六名。チーフリーダー一力英夫、サブリーダー西沢与志英。食糧、約二〇〇貫、道具、約八十貫、燃料、約五十貫。以上

〔附記〕 連続的好天気に恵まれ、予定より一週間も早目に終了したが、計画が順調だった反面、下級生部員が冬山のシゴキを充分に体験出来なかつたことは残念である。

ルートについては、クリヤ谷より笠ガ岳の登路には雪崩の危険性は薄かつたが、撤収時においてはかなりの積雪があり、一月下旬

以後の登攀には雪崩に対する細心の注意と猛烈なラッセルを覚悟せねばならぬであらう。錫杖、笠、双六間の稜線は予想外の積雪があり、各天幕地は予定より間隔がかなり接近し、計画外のC1・C2の中継地が必要とされた。抜戸岳のコールには雪崩発生の可能性が充分認められた。西鎌—穂高の稜線は例年の如くで特筆すべき点はないが、笠、奥穂高間のロング・コースは各天幕間とも連日猛烈なアルパイトが要求された。極地法の進行については、前半において地型が平凡であることと新人訓練を重視した行動は、所謂「極地法登山」を変則的なものとしたが、極地法の課題ともいうべき、荷物の運搬及び天幕間の連絡、全体的なメンバー・シブは極めて順調であり、特に夜間連絡用のフライヤー(映画用)は登頂の報を瞬時にして各天幕に伝達し、撤収を円滑にする因となつた。今回の最大の失敗はC5(山岳会より払い受けたマナスル天幕)の破損であるが、生地が殆んど老朽しているにもかかわらず、点検を怠つたことには大いに反省すべきである。その他検討すべき余地は限らないがわれわれはこの冬山を発展のための糧として今後も精進を続けたい。

(一力英夫)

駒込富士の山開き

古 沢 肇

都電の広告で、「江戸情緒駒込富士の山開き」というビラを見て戦前の縁日の暇を思い出した。古川柳に、「江戸の富士裾野

は茄子の各所也」、「蛇を下げてお七が墓所聞あるき」、などとなるが、江戸の年中行事に数えられていた六月朔日の富士詣にはつきものの麦わら蛇のことなども気になり、行つて見る気になつた。

一体、東京には「お富士さま」がいくつあるのか、くわしいことは知らないが、足利期創建と社伝にある通り、なんといつてもこの駒込が家元格であらう。周囲一帯戦火で焼けてしまつてから、痛々しくも荒廃した姿を待たす電車の窓越しに眺めていたが、こんど久しぶりに行つて見ると飯の社殿は粗末でも、山には講中の新しい碑も見受けられ、縁日も賑つていて、それに麦わら蛇も復活しているのが何より懐かしかった。

蛇は、昔は六尺位のものもあつたというが、今は人差指ほどの雑木に麦わらを巻きつけて蛇の形を作り、杉葉でひげを生やしたもので金三十円である。雷除けのおまじないとも言ひ、以前は広く関東一円の浅間神社に行われていたものらしい。

話は変わるが、いつか土曜会での話をしたら、沼井鉄太郎氏から古来富士講では、「富」の字を用いず、「富」の字を用いたということを教へられた。なぜ正字を避けて俗字を用いたものか、こんなこともよく調べてみたら、きつと面白いに違いないと思う。

(三三、七、一)

北田正三氏死去

北九州支部長北田正三氏(会員番号九八一)は七月二十二日阿蘇鷲ヶ峰松尾谷で登山中死去。享年六十五才。

積雪期の劔峰北

西バットレス登攀

電気通信大山岳部

昭和三十三年年度の冬山合宿は部員数が増加した機会を利用して部員を二分し、下級部員は上級部員がリードして東北吾妻にスキーを主とした山行を行い、一方、各学年のリーダー格の部員は監督がリードして小人数のパーティで氷雪の山に入り、特に技術の向上と行動能力の増大をはかることを狙いとした。これは歴史が浅く、しかも山行日数が種々の点で多く取れない理工科系国立大学山岳部でリーダーを養成するための苦肉の策なのである。その目標として、劔峰早月尾根を選び、全員がB・Cから出来るだけ頂上に往復して一・二年部員を冬山に馴れさせ、その間、天候積雪状況の良い時を狙って、二名で本峰北西バットレスを池の谷から頂上まで、完全登攀を試みることにした。

劔峰北西バットレスは別名劔西壁とも呼ばれ、早月尾根を一方の縁として右俣本谷を中に池の谷右俣奥壁と対峙し、頂上から直接池の谷に落ちる雄大な胸壁で、昭和十年四月立大パーティによつて登られている。

芳野他一名は昨年八月に劔尾根より偵察の上、インゼル附近からこゝを試登して見た。地形は不明瞭ながら三本の支稜が平行して走り、われわれはこれを西側から見

て右稜、中央稜、左稜と呼んでいるが、しかし、各支稜間には無数の小岩稜と岩溝が交錯して物凄く複雑な地形となっており、実際にこの岩場の真中に出てしまうと、どれが主稜なのか、落語の「平林」みたいなもので、一寸したハンゲでも巻くと次に登っているのは、はたして前の稜線の続きなのかしら、といった具合になつてしまふ。昨夏の試登は、三窓から劔尾根の下を巻く池の谷右俣から中央稜のインゼルに取り付き中央稜を登つたのであるが、大岩岩層は逆層で猛烈に崩潰しており、各稜線間は大体ゲレルのつまつた浅いリネで、場所によってはスラブとなつてゐる。浮石のためホルドも信頼できるものは少く、だましまし慎重に登るより他無い。ザイルを操作し、一歩登るごとに無数の浮石がいや応無しに大小の落石となり、登行中、池の谷中に号砲が轟き続き、下の方に西壁登行中につき通行禁止の立札でも立札でも立ててくればよかつたと語り合つた。そして逆層の常としてちよつとした岩塔は垂直かハンゲ気味で、それを乗り越してもここには外傾したアンカーレッヂが待つてゐると云つた次第である。しかし、全体の平均斜度がわるい(二千八百メートル以下は四十四度から五十度、二千八百メートル以上は七十五度から八十度)のと、左側に殆んど垂直な劔尾根側壁が偉圧的にそびえるために、物凄く高度感を受けなかつた。ハーケンはどこどころの岩塔に打てることもあるが、一打ちごとに表面から岩が欠けてしまふという質の悪さで、結局ひどく

時間が掛り、その上雨の多い昨夏の空は、取付で(八時半)晴れていた天気も正午過ぎには、いつの間にかおし寄せた濃霧にとざされ、午後三時頃から雷雨が来り頂上まであと二百米弱のところからやつとの思いで早月へ退却し、二千六百メートルでビバークの羽目に陥らされた。なおわれわれの引返し点附近に頂上から投げられたと思われる新田の空缶が幾つか散乱していた。最近の登山者の道徳心を物語つてゐた。このようなわけでこれを完登するためには、浮石の隠れる積雪期が有利だと思ひ今回の計



画となつた。

編成

＜チーフリーダー＞監督 芳野越夫(サブリーダー)大橋宏之(工四)、山崎敏夫(通三)、森繁(通二)、高田茂良(通一)、松本真明(通一)、計六名

行動

昭和三十三年三月十三日、全員十五貫の荷を背に急行北陸号で上野を後にした。十四日、富山より上野へ着き、早大がチャーターした空トラックに便乗して苦も無く伊折に着く、こゝで荷の半分をゾロメキ発電所へポツカシ、その夜

は伊折に泊る、十五日はバンバ島に全装備をあげ、快晴の三月十六日、いよいよ全員で早月尾根にポツカを開始し、千六百メートル附近にデポして下る。今年特筆すべきことは、第一に早月には入るパーティの激増で、毎年のように来ている者にとつてまさに驚きである。第二に気温が高く雪の少いことであり、信じがたい程登行が楽だ。

三月十七日 晴後吹雪

バンバ島より芳野、高田、松本は、この好条件を利用して一気に二千三百メートルにカマボコ一張りのB・Cを建設し、大橋、山崎、森は二千三百メートルでポツカの後千六百メートルのデポ地点に引き返し、こゝにミッドを張って幕営する。夕方から南西の風が次第に強まり、日没と共に吹雪となつてしまつた。

三月十八日 吹雪 沈黙、一日中大変なドカ雪で二時間おきの除雪も効かず二千三百メートルでは六人用のカマボコテントが完全に埋没し湿雪のために中央フレームを折られてしまつた。

三月十九日 霧時折小雪、夕方晴れ、明け方吹雪は止む、テントをはい出ると何と二日前に確かに平地に張つたテントの屋根の上二十センチ位の雪面があるではないか。三人で昼までかきりどうやら掘り出し、フレームに応急修理を施す。テントより周囲の雪面が一尺も高いのにたゞあきれるばかり、局部的ではあるが三月中旬に一・八メートルの積雪だ。ポツカ隊のために芳野と高田で逆ラッセルに出掛けしたが、胸までのラッセルに散々苦しみ、やつとの思いで千九百メートルまで下り引返す。夕方から北西風が強

まり雲海の彼方に夕日に染まつた毛勝三山が浮び出る。

三月廿日 夜吹雪後晴

二千三百米より高田、松本は逆ボツカに、芳野は昨夜の新雪を除雪した後、上に向けラッセルし、エボシ岩にて引返す。全員B・Cに集結し明日から登行開始だ。その夜は満天の星空に西風が荒れ狂い、折れたフレームのきしみに心配させられる。気温が下る。

三月二十一日 快晴

芳野、大橋、森、松本で頂上へ往復する。北西風が強く、頂上附近から盛んに東面に飛雪が舞つてくる。今年は主稜にクラストしたところが少い。しかし北西バツトレスの上部はまともに吹きつける風でかなりクラストし始めている。

三月二十二日 曇後晴

東風で昨日とは逆に飛雪が頂上からバツトレス上に落ちている。芳野、大橋、山崎、高田で再び頂上へ往復する。昼頃から気温が急降下し、風も北西に変わり、早月上旬もかなりクラストして来た。夕方から晴始め、天気図は明日の快晴を予言している。雪も大切しまつて来た。いよいよ明日決行しよう。シシ頭附近からルートに詳しく研究しておく。

三月二十三日 快晴

快晴だ、明け方に風が取り思わず寝過ぎす。八時にB・Cを出発する。九時十五分、エボシ岩二千七百メートル附近で三十メートルでアンザイレシ、サポートの山崎と森に送られて池の谷右俣中央部目掛けて下降を開始する。メンバーは芳野、大橋の二人。池の谷右俣の雪はクラストと深雪が交互に現わ

れる。連続下降で真直に四十五分、高きにして約百五十メートル降りた地点で中央稜の末端に取付く。時正に十時。

この取付点附近は予想外に悪く早月から眺めると露岩の間には適当にクラストした深雪が詰り易しうに見えたが、実際は逆層スラブの上に薄氷が張りついているといういやな場所である。中央稜に取付くには是非これを登らねばならない。右側のクローアールは堅い旧雪上に深雪が乗つていて雪崩を大いに警戒する必要がある。この地点は夏のバツトレス沢の流のところで、逆層の岩をアイゼンをはいてバランスに苦心しつつ慎重に登り始め、約二十メートル登り、一寸したハンクを乗越すとあと五メートル稜線に出られる点にきた。そこにアイスハーケンを打つ、しかし下がゲレルらしく頼りにはならない。どうもこの辺で危なそうな気がして下を見る、よし真下は岩稜だ、右側には大橋がジッヘルして居る。しかし右側へ落ちたら止まきれまい、岩稜の左は狭いが雪のつまつたクローアールだ、こちらへ落ちれば下の岩稜をザイルがまたぐから止められるな、「行くぞ」と声を掛けハンクを登りつめ、あと一息で乗越すところで力を掛け左手のホルルドの岩が音も無く抜け、裏側の蒼水が目映つた。やつた、足は外傾したスタンスの上、一たまりもない。約三十メートル、瞬間左側へとひらめき右足を蹴つた、うまくクローアールに飛び込む、ハーケンが抜けた、ザイルが一杯のびて止まつた。どこも何ともない。岩稜の向う側で大丈

夫かと大橋の音がする。すぐザイルを外し岩稜の下をまいて大橋のところまで登る。どうもこの中央稜にこゝから取付くのはあまりにも危険だ、西北壁に日が当たらないうちに右側クローアールを登るだけ急いで登ろう。トップを交代しながら登行開始、クローアール内は約一尺の新雪の下に堅い旧雪があり、ラッセルしながらこれにアイゼンをきかせて登る。何となく上の軟雪が滑り出しそうで気持が悪い、壁面に日が当り出したらど十一時過ぎ、日が当り出したらどうなるか解らないので急ぎに急いだ。クローアール内の平均傾斜は約五十度、慎重に隔時登攀で行く。二千八百メートルあたりから傾斜が急に増し平均七十五度になる。仰ぎ見る露岩が皆頭上にハンクしてのしかつて来る。いよいよ日が当り出した。しかしもう安心だ。雪面は堅くクラストしてアイゼンが保持よくきまつた。傾斜が急なのでステップを切りつつ登る。

この辺でこの岩場の常として頂上の位置が解らなくなりどこも同じに見えて来る。コールすると、少々左の方から頂上にいるサポートのコールが返つて来る。ルートを左より取り頂上直下の壁に出ると一面の蒼水の八十度近い斜面を慎重に登る、頂上近くジッヘルする手も何となく軽やかだ。足もととはスパツと切れて、はるか下に池の谷二俣が見え高度感に充分過ぎる位だ。クローアールに取りつてから十九ピッチ、十二時十五分、頂上から一ピッチ平蔵によつた主稜線にサポートの笑顔に迎えられるのし上つた。

登頂のすぐ後に ③

沼井 鐵太郎

マカルー初登頂

一九五〇年のアンナプルナに続いて、フランス隊が二つ目の八千メートル級の初登を勝ち得たことは、世界の一流登山国のものとしてさすがと感嘆させられる。しかも驚くべきことには、フランス隊はサードのギャルツェンを加えて九名の全員が、世界第五位のマカルー(八四七〇米)に三回の波状登頂を重ねて、理想的な完登を達成したのである。実にそれは一九五五年五月のことであつた。

ジャン・フランコ著「マカルー」(一九五〇)の邦訳「マカルー」全員登頂(近藤等訳、一九五六年一月、白水社)によつてその登頂をうかがふ。

まず第一登は五月十五日ジャン・クジとリオネル・トレイ。彼等は初登感激をあらん限りの声で下方に待機中の仲間知らせたのである。その日フランス隊長は第六キャンプまで登つたが、到着の瞬間、「奇妙な協和音の異常な叫び声、風と距離によつて変えられた人間の声が、これまで風と風のみが咆哮してきたところで聞えてきた。それは歓喜の叫び声だ。間違いない。しかも仲間たちが叫んでいるからには、頂上にいるからなのだ。マカルーは登頂されたのだ! このすばらしいニュースは、実を言えば、私たちを驚かせはしない。この瞬間、なにがホツと解放された気持、成功が自分たちの眼の前にあるのだという生

三月二十五日 曇後雨
伊折から見た朝焼けの剣の陰影は実に素晴らしい。上市へ下るトラツクの上で、遠ざかり行く剣の西面、そして頂上直下に見える北西バツトレスの姿を飽かず眺める。やがてそれはうすやの中に消えて行つた。

(芳野赴夫)

々しい意識、私たちは忽ち別人になつたような気がする」と記している。クジとトレイがキャンブに帰着して隊長とあつての語に登行の大凡と頂上の様子以外には何も記されてないので、初登の登頂感激並びに行動はその発声信号の外は想像するより外に仕方がない。或いはフランコが「ヒマラヤの巨峰の斜面では、感激というとは皆無だ」とした登高苦闘がむくいられて、近藤等訳編ベルグハイル選書2「初登攀」(昭和三二年六月、明文堂)に書かれたラ・モンターニュ(一九五五年一〇月)所載リオネル・トレイ手記の訳文によれば、トレイはマカールの尖頂に先登するクジの行動をフィルムに納め、次いで証拠固めのパ

高頭仁兵衛翁が四月六日午後六時、長岡市深沢町の自邸で亡くなりました。思えば去る二十九年七月、第二回目の卒中以来長い横臥生活、それも殆んど耳も口も利けない不自由な生活を、八十才の高齢で耐えて来られたのは若い時から強い頭張りの精神かと思われまふ。その上主治医もいつおられるように御夫人いき子様及び御妹咲子様等の献身的看病が、翁をこれまで元気づけられたようです。

亡くなられた時は急で、一寸近所まで出かけられた御家族の方でさえも急を聞いて引返された時は既に臨終に間に合わなかつた程でした。葬儀は八日施行されましたが、翁には実子がおられないので、弟様の長男寿久様(新潟県庁勤務)

ノラマ撮影を行つた。それから彼は足早に登頂して、「私は何一つ特別な喜びを感じない。誠実な仕事を完成した職人のような喜び以外には」とか、「身も心も打ちこんで闘つた後、最後のひとふんばりで、これよりもつましい」とある山頂に立つた時に感じたような誇りかな熱狂ぶりとは、いまの感じは、なんとかけはなれたものなのだろう」とか、絶望裡に活を見出す式の登頂の夢想とは違つて、いわば計算された通りの乗登のせいだ、「何かしら張合抜けがしたものだ」とかの言葉を投げけているがまた「巨峰のうちでも、最も崇高な、理想的な峰頭に立っているのだ。永年の間辛抱し、熱心に働き、死の危険を冒してのち、若き

が遺牌を奉仕して野辺送りなされました。当日はまれにみる快晴で特に土座に「持ちて行きたし」の魚沼三山が早春の光に輝き印象的でした。

高頭翁の死去

まで、殆んど毎日出かけられたと聞いています。併しこの楽しみの散歩も身体が次第に弱められ、家族の方が心配されて迎えに来られるようになり、次第に散歩の範囲も狭められて、近年では邸内の散歩のみであつた由です。

昭和二十九年五月、小出山の会のはからいで、武田久吉、横有恒

日の途方もない夢が、ここに実現したのだ!それなのに、これに失望するとは、自分はどうかしているのだろうか!」と、滞頂僅かの時間内に思い直して、条件反射による印象感覚から、忽ち登頂感激の完成に化している。

第二登の場合、翌十六日フルンコ隊長、ギド・マニヨヌとギャルツエンの三人。マカールの頂上は申分のない雪のピラミッドで、三つの山稜のすつきりしたラインは急峻そのもののなので、柄まで突きさしたピッケルの周りに三人でザイルを結び合つて立つのがやつとくらしい。隊長は登行中八五〇〇米近くの所でアイゼン技術の講義をザイル順の中においたギャルツエンにしてやつた位こともなく過

金山津二

発病のはじめ頃は多少耳が聞こえておられたのですが、その頃「お嫁に行きます。隣村、愛ちゃん待

毎日ラジオが歌つていたのです。病室のラジオで矢張り耳慣れられたのが、ある時翁は「愛ちゃんつて、どこの子だね」と看病の奥様にたずねられたと言ふことです。

して登頂したもの、やはり皆興奮して多弁になつたようである。ギャルツエンは、何度も額を雪につつこんだとある(額を床に、または地につけるのは仏教徒の最大の礼拝形式慣習ではなかつたらうか、と筆者は考へる)。このため隊長のカメラが転落したが、奇蹟的に一枚岩の所でとまつていた。すべてが幸せだつたことがわかる。それから、「マカール」登頂を一緒に果したフランスの国旗を、ルツクザックにしまい、月と太陽のついたネパールの旗をギャルツエンに与えた」とあるのは、或いは第一登組のものかとも思われたが、やはりそれは隊長持参のものであつたようだ。ということは本年春来朝のレビューフアール講演の際

「高頭翁と愛ちゃん」のとり合せは私には忘れられないのです。この会報で、いつか横さんが紹介された「旅館、山岳」の大看板はその後間もなくはずされ、元の静かなお邸に返つていきます。裏の大杉では間もなく蟬しぐれが始まりました。その大杉の下に「高頭家代々之墓」に日本山岳会の創立者の一人であり、「山岳」を三十年間も殆んど一人で発行し続けられた、日本山岳会の慈母の恩人高頭仁兵衛翁(幼名、式太郎明治十年五月生れ)は永眠されております。

晩年の翁や病中の翁については「越後山岳」四号に色々書いてあります。翁の逝去を悼むと共に謹んでここに報告致します。

なお翁からは長岡山岳会の名誉会長になつて頂いておりました。

に見たマカール記録映画で裏書きされている。即ちマニヨヌの撮影した絶頂の光景では、第一登者の残した旗などの記念物は画面になつたようである。

第三登は五月十七日、ジャン・ブーヴィエ、セルジュ・クーベ、ピエール・ルルー、アンドレ・ヴィアラットの四名。しかし本文においては今何も述べたものがない。かくてマカール遠征隊中、医師一名と地質学者二名を別にして、サードのギャルツエン・ノルブを含めての全隊員が三日間連続登頂したことになる。天候が稀れに見る快晴続きであつたことは成功の最終的決定要素だが登山構成の面において、酸素装置その他の装備の優秀豊富性と、隊長の計画が当初から全員登頂をめざしたらしく綿密に実行されたことが招いた成果でもあつた。重ねていえばマカール登頂は、前年度一九五四年の偵察(七四一〇米のマカール第二峰及び七九七米のチョモロンゾの夫々の初登を含む)によつて、全員登頂を目的として計算された計画を殆んど外れることなく実行されたという事実、そして無類の快晴、そしてまた絶頂が全くの点状頂であつたことなどの諸条件が与えた明らかな登頂であつた。そこにはフランス隊の民族的の明るさを感じられるのではないか。

(一九五七年六月稿)

山の医学講演会

厚生省主催山の医学講演会が七月十六日三越劇場で開かれ辰沼広吉、杉本良一、吉村寿八、山下健三氏の講演があつた。

志村烏嶺翁(下)

伊藤 隼

その後、不幸にも令室の死にあり、さすが豪気の志村氏も、意気沮喪の気味で登高を中止し、大正七年の冬より同年まで、台湾の低地を巡り、紅鳥嶼に渡つたのが目立つた収穫で、大正十一年の五月には、常夏の島、緑の山に別れる。惜しみつつ、内地に帰られてゐる。

帰国してからは、内地高山の荒廃をきいて、頽廢の山を探るに忍びず、愛好の山白馬や、その他の北アルプスを避けて、早池峯、戸隠、谷川岳、日光白根、八ヶ岳等に足を向けて、山行に終止符を打つたのは、誠に惜しい事であつた。尤も山行の記念として、明治四十年には「やま」として、同四十一年には「高山植物培養法」を、明治四十二年には「山岳美観」二輯を、(写真板六枚宛を一輯として)、大正二年には前記の「千山萬岳」を遺している。この内「千山萬岳」の挿画は、丸山晩鏡、石崎光瑤、榎谷徹蔵諸氏の筆に成り、同書挿入の写真は、自分で撮したもの、外に高頭仁兵衛、高野鷹蔵、辻村伊助等の諸氏から、借用している。このことから推考しても、相当広く岳友間に交際のあつたことが伺われる。またそれ等の著書や氏の語る所等によつて山歴を述べれば日本内地では富士、箱根を南限に、恐山を北限として、三十八座を駆け、これに外地の新高山を加えて、三十九座に登攀している。尤

もこれに浅間山、日光白根、八ヶ岳、早池峯、木曾御岳の各二回及び、戸隠山の五回、白馬山の十三回を加えれば、延登山数は六十山となる。これを登山した年数から見れば明治十二年から大正十三年までの四十六年間に、二十三年間まで行近代における日本登山諸大家の登山実数や、登山年数に比べて見ても、遜色がないように思う。なおまた特筆して置きたいことは、日本山岳会創設当時の委員の一人であつた城数馬氏は、高頭氏が財政的に、山岳界の維持費を援助するといふ言葉を信じ切れず、わざわざ信州に出掛けて行つて、志村氏にも同行を求め、越後在住の高頭氏宅を訪ねて、その言葉を確かめようとした時、志村氏はそれには及ばぬと高頭氏に打電し、高頭氏の長野への来着を待つてその真意を確かめた。それで補助金問題が確実となり、山岳会の基礎が確立したという話である。そのことを聞いた私は、そうした話を何かに書き遺して置いて貰いたいと、切りに勧めていた所、やつこのこととで山村民俗の会誌「あしな」第三十八号に発表された。志村氏はまだ、頭も確かで筆も立つ、台湾から引揚げて後は、目黒不動の近くで園芸もやり、大震災後の大正十三年からは、北村大作氏の依頼によつて、箱根にある岩崎小弥太氏別荘のロックガーデン建設について、設計並に監督を引受け、二カ年許りは、三月より十月まで毎月出張して、その任に當つていたこともある。川口に移つてからは、二十年間許り土地の開墾もなし、養鶏もやつていた。

それで私の家内なども、養鶏に対して疑問があれば、氏にこれを質したこともあつた。氏も今や漸く老境に入られたが、三人の息は何れも会社の社長をつとめ、三人の令嬢も良人の許で平穩な生活を送つてゐるので何等不足のない幸福な日を送つてゐられる。それで七十九年の年頭には、金もいらす命もいらす名もいらす、捨てた浮世になすこともなし。幾山河越え来し跡を眺むれば、心に残る塵だにもなし。花や鳥、山や谷とて幾月日、過ぎこし跡も一睡の夢。と私に書き贈り、一昨年は「人皆菩薩、到處淨土」とかいて示された。そして近時頻りに自著を古本屋に求めて、郷里の学校に贈つたり、惜愛して、郷里の学校の贈つたり、帝大や、科学博物館等に寄贈したり、その一部を私にも頒つたりすることやを思ふと、何だか一抹の淋しきを感じぬでもない。意思が強く驚異すべき体力を持ち、猛獣の狂うようにアルプスの山野を駆け巡つた、氏往年の活躍時代と想い合せて感慨の深いものがある。志村氏の少年時代――

志村氏は本名は寛(ヒロシ)、明治七年二月五日に、栃木県那須郡鳥山町旧鳥山藩士の家に生れた。祖父は明治維新当時まで郡奉行を勤めていたが、この祖父は植物が好きで、菊や松の鉢植に熱中していた。それで秋になると「志村家に菊見に行こう」といつて、誘ひ合せては見物に行つたものである。それで氏もまた祖父の血を受けついでか、ラン等の花卉を集めて来ては栽培することを楽しんでゐた。この趣味は八十歳を越えた今日まで続いている。次に、母方の祖父は、黒羽大関藩の筆頭家老で、藩政に尽したことの大きかつたことと、維新の際における功勞とによつて、大正天皇より正五位を贈られた方であり、また父上大関増虎という方も、正五位を賜つた方である。この方も祖父と同様、那須や高原、日光等の各高山で探鉱に努め、那須の硫黄採掘には、殊に功績があつたという。志村氏はそうした家系を持つ家庭に育つたが、幼時は病弱蒲柳の質で、近所の小供達と嬉戯することやを好まず、たゞ一人で森林の鬱蒼として城山の山中に入つて、草花を摘んだり、木の実を拾つたり、小鳥をたずね、落葉を踏んでは、孤独の中に楽しみを求めつつ、少年の日を送つてゐた。この城山に続いて、自宅の後方に聳え立つ毘沙門山の頂に立つては、山麓の屋敷町や、これを巡る那珂川の清流、茨城との国境に連なる山々を望み、東北にある鷲子山、これに続く八溝山、正北に噴煙の立ち昇る那須岳をも望んだ。また那須岳の西には高原山や日光の火山帯があり、快晴の日には更にその西方に煙を吐く浅間の峯頭をかすかに望むこともあつた。更に東南に瞳を転じては、筑波山を関東平野の一角に見出すこともあつた。鳥山町は実に盆地の底に静かに眠る小さな町で、城山や毘沙門山は、氏の童心を高きに引上げ、視野を四方に推し拡げて行つた。氏が後年日本各地の山岳研究に、

心を走らす礎を築き、その萌芽を育んだ山であつたといえよう。氏はまた幼年時代は、鳥山藩校であつた作新館で、漢文の素読を習つたり、「文選」を学んだりしただけに、漢文の素養があつた。従つて文章に漢文口調の所もあつたが、簡明で余韻を含んでゐた。十六才の頃は一カ年余り、鷲子山の麓にある富山村の小学校で、教鞭を執つたことがある。ここは鳥山の町から三里程の所に在つたので、志村少年教師は、往復六里の道を、けなげにも毎日休みもせずに通勤された。このこともまた後年における山野跋涉の脚力を養う上に預つて力あつたことだと思ふ。因にこれまで氏の経歴を述べたものには、前記信濃毎日新聞の外、旺文社で出している雑誌「中学時代」の昭和卅四年四月号に掲載したもの、が精しい方であるが、少しく誇張に失した点があり、また不足の点が多いので、私はこの老先輩の山歴をして、若い岳人に伝えんがため、拙文をも顧みず、執筆に及んだ次第である。

ヒドン・ピーク登頂

ニコラス・B・クリンチをリーダーとする八名の米國登山隊は七月四日カラコラムの未踏峰ガシヤブルム第一峰(ヒドン・ピーク)(八〇六八米)世界第十一位)登頂に成功した。

ラカボシも 英國・パキスタン合同登山隊は六月二十五日カラコラムのラカボシ(七七八八米)登頂に成功した。登頂者は隊長パンクス大尉とサイテ中尉。



会員通信

第十二回ウエストン祭

塚田孝治

幾人かここに見知りし人みえずウ
エストン碑の巖へ寄りゆく
岩肌をあらわにみせつ霞岳視線ひ
きつ夕あかるめり
谿深くひとよ宿りて目覚めたるあ
かとき樹を打つ雨音す
褐色に朝の焼岳あかるみつ谿底の
雨しずかになり
おしなべて深きみどりの明るさに
山をおいて樹海ひそまる
底冥く斑雪縞成し岳沢は朝の光の
いまだいたらず
押しよする朝の黒雲穂高嶺をおお
わむとし翳深くする

梓川の青い流れが瀬音を立てて、
ぐるりと大きく弓のように曲がつ
ている。
そのつきあたりの一枚岩に
堅くはまつた浮彫の
銅のパネルのウエストン像。

そのウォルター・ウエストンの
十二年目の祭をするとき集まつた
男女無数の登山者たちの

押してきし朝の黒雲にかくれゆく
斑雪は岩山の初夏を粧う
小瑠璃嶺く森林帯に処女等は充足
の嘆声樹の間へちらす
山に歌うエーデルワイス合唱団去
りがてにして心に沁みる
一九五八年六月十四、五日

大方(毛無)山行

日高 信六郎

五万分の地図をひろげて山を物
色していると、図の上の取扱いで
ずい分山に運不運があることに気
がつく。山頂や連嶺、登路までが
スッポリ一枚の図幅におさまって
いるのは便利でもあり、地図をひ
きわたるたびに、その山に親しみが
深まってくる。白山や飯飯山など
(富士山もそうだが)のように、
目ざす山が継目のところにあつた
り、何枚にもかかっていたりすると、
と、地図が見にくいばかりでな
く、ついその山に疎遠になつてし
まうような気がする。また、図上
に名が現われていない山も気の毒
だ。特に目立たぬ山容をしているわ
けでもなく、相当の高さをもちな
がら、三角点や標高のしるしだけ
ですまされている山がチョイちょ
イある。

上高地にて 尾崎 喜八

魂には自然を持ち
心に山を抱きしめた
敬虔な、素朴な
美しい顔のなつかしさよ！
ああ、上高地の谷に六月の風が歌
い、

毛無と大方という名前を二つとも
持ちながら、こんな取扱ひを受け
ている山なども同情されていい組
だろ。この山頂から間近に仰ぐ
富士の均整のとれた姿や、「麓」
部からひらがる朝霧ヶ原の茫漠
とした原野などは、田部さんの記
行や冠さんの写真で早くからおな
じみになり心惹かれていたのだ
が、戦後聖、赤石の頂上からは
かに夏の富士を望んで以来、両者
の間に介在する春の七面山、晩秋
の筑ヶ岳と登って、同じ方角から
聖山をながめることが度重なつて
来ると、どうしても同一線上に残
る今一つの眺望台から、間近に富
士のすがたを仰ぎ見たい気持が頭
をもち上げるのであつた。

五月はじめの連休に出かけたの
は会員野口、鶴岡、古沢三君と私。
富士の宮で浅間神社に詣でると、
思いがけなく、社頭の清冽な湧水
にかかると橋を渡って神前結婚場
に向う盛装の花嫁に出くわした。白
糸流から富士吉田行のバスに乗り
ついて行くと、田貫沼のあたりで
大ぜいのハイカーをおろし、猪の
頭をすぎると客もへり、林もつき
て、ゆるい起伏をおこして広がる
草原を行く富士は右手雲の上に頂
化粧柳の綿が舞う。
霞沢、六百の堅固な岩の幔幕には
柔かな午後の日光が蜜のように流
れている。
これらすべてが予想したものでは
ありませんが、
なんと新しく、珍らしく、
なんとあらがいがたい現実として
私たちを打つことだろう。
六月十四日 作

を見せ、正面に目ざす毛無の頂は
雲に入つて見えないが、それから
左手に天子ヶ岳につづく山なみの
裾には、開拓の人家や畠がひろが
る。荒涼という感じである。朝霧
高原で降りて麓の部落(富士宮市
に編入された)まで三十分ぐらい、
広いがゴロ石で歩きにくいみち
が通じている。村は大家の竹川家
のほか二十軒あまり、乏しい土地
を耕して、さきやかな田もある。東
京農大の富士寮に泊めてもらう。
昨年丸焼けになつて建て直され、
小さくはなつたが三十畳あまりの
大部屋が三つあり、夏は学生で一
杯だが、その他の季節には泊めて
もらえ。管理人の袖野玉策氏夫
妻が親切にもてなしてくれた。

翌朝はまず沢に沿って、下部に
越える地蔵峠に出た。金山沢とい
う名の通り、このあたりは古くか
ら金山があつて、数年前まで採鉱
した折の小屋が峠に近いところに
あり、部落のかみ手には精錬所も
残っている位だが、みちはよく
ついでいる。下部がわのみちは手
入れがしてないように見えた。峠
には浮彫りの地蔵さまが二つ並ん
だ小さな石碑が立つている。右に
折れて山稜を伝うと間もなく下部
からのいいみちに合して人くさく
なる。麓からここまで静寂そのも
の、鳥の声が耳を楽しませ、八潮や
山桜が眼をよるこぼせるばかり。
ひる過ぎ頂上について三角点の橋
に上り昼寝する。毛無というが、
頂上の東側を除いて、上の方まで
相当茂つており、西側は密林だか
ら、大方山というのは下部方面の
名であろうか。この日は終日霧が
あり、中腹から上はかきもく視界

尾瀬から会津駒へ

村上金吾

がきかなかつたのが、さかおとし
のみちを麓に降りる途中、ガレの
上部木立ちが切れたところで一休
みしているとき、一瞬雲霧が開ら
けて富士が姿をあらわし、われら
の念願を聞きとどけてくれたのは
ありがたかつた。
翌日は春まだ浅い高原を横切
り、晴空の下に富士と裾野のゆつ
たりした景色を満喫しながら、根
原から本栖に出てバスをつかま
え、二時すぎには河口駅から電車
にのり込んでいた。

沼田を一時十五分たつたバスは
予想に反し十人足らずの閑散さは
有難いが、動揺はものすごく、前
夜来の不眠にもかかわらず居眠り
さえできない。三時半すぎ富士見
下につき、そこから歩き出す。そ
ろそろ夜もあけるのだが、林の中
は暗く懐中電灯をたよりにのぼつ
てゆく。頻りにホトトギスが鳴
く。五時半すぎ富士見小屋につい
て少憩、葛蒲平へ往復、コバイケ
イソウ、ウラジロウラクなどが
美しい。尾瀬原におりる道は、こ
の頃の炎天にもかかわらずぬか
みの連続だ。
原においてはじめてニッコウキ
スゲ、カキツバタなどの群落を見
る。竜宮小屋で朝食、イワナの煮
付がある。ナガバモウセンゴケ、
アサヒラン、トキソウなどの目に
つく湿原を横ぎつてゆく。東電小
屋であるが、日陰もなく暑そうな
のでそのまま前進、橋を渡つたと
ころで休む。まもなく温泉小屋、
一休みしてから、三条滝を見にゆ

く。このあたりブナが多い。思つたよりも悪い道だ。滝についてロブにぶらさがつたりしておいていつか流つぽまで下りるのはやめた。

帰ってくる途中で雨が降り出した。イワナ釣が大きな重そうな箱をさげてきたので大漁ですわという、サカナは大したことはない。水がはいっているのだという。温泉小屋泊、低温で加熱していることはきいていたが、温泉というからは朝から晩まで湯にはいれるものと思つたら、湯のあるのは晩だけ、それも男女一時間交代、一人十五分以内とかいうことだった。イワナとかネマガリのタケノコとかいうものを食膳に期待したが、実際はソーセイジだの、イカのてんぷらといったものが出た。翌朝燧岳へ登るので水筒に水をつめようとしたら、山には水があるから水を持つてゆくに及ばないといわれた。ところがぬかるみはつづくが飲水は全くない。頂上でどこかの四五人連れが水を飲ましてくれたことは有難かつた。

沼尻小屋につくともなく舟が出る。ミツガシワの多い湖岸をはなれた左右をながめているうちに長蔵小屋前につく。最近できたらしい新しい休憩所に休んで昼飯にする。本館の庭ではじめてお目にかかった平野長英氏と立話、私はここに尾瀬の植物園といったようなものがあるときいたことがあるように思つたので伺つたが、そんなものはない。そのうちつくりたいともいわれた。

尾瀬沼をふりかえりながら沼山峠を越える。上の方はアオモリト

ドマツが多く、下の方になるとやはりブナが多い。午後三時七入小屋、同三時半きり手につく。バスは出たあとで松枝峠まで歩く、柵屋泊。名物の生そばはたしかにうまい。夕食には大きなイワナがついた。おしんこはキクイモらし

翌朝六時出発会津駒ヶ岳登山、宿の主人がわざわざ村はずれの登山口まで送ってくれる。この山は登山者もまれに、まことに清潔な山である。九時半頂上着、一等三角点がある。残雪の多い稜線を中門岳往復、このあたり小沼が多く、イワイチヨウ、コバイケイソウ、チングルマ、イワカガミなどの花も多いが、やはりこの山ではナンキンコザクラが代表的な花のようだ。二時頃松枝峠着、三時半のバスで出発、湯の花温泉に立寄つて見たかつたが、バスの連絡がなく思いがけな山口というところで泊り、翌朝のバスで只見まわり、柳津などを経て会津若松に出た。

(三十三年七月十日〜十三日)

小川山紀行

野口末延

最近高い所へと人が集まるので低くとも何処か静かな山と前年から、ねらつていて漸く本望を達したのがこの小川山である。五月二十四日、甲州金山での故木暮前会長の碑前祭に参加。翌二十五日、原田幹市、富沢磐の両君と早朝金山を出発、大日小舎を経由、八町平、奥界尾根と路らしい路もない昔の秩父の山らしい苔蒸した、そうして見通しのきかない

陰鬱な森林、熊の爪跡、熊の糞、それに誰一人もいないというこの頃にしては珍らしい山であつた。

頂上(二等三角点標石あり)(二四一八米)では、北に御座山、其左に低く天狗山と北山、東南に国師岳と奥千丈、南に金峯山、西南に瑞牆山が黒くそしてその後方に茅ヶ岳が見えただけであるが、思つたより眺望が好いのですつかり喜んでしまつた。しかしこれが快晴ならば、南アルプスも見えたものと思うと残念であるが欲をいえば限りはない。石楠花が多いので花時にはさぞ見事であろう。

八ヶ岳を覆つていた暗雲が段々と東へと移動し来り、小雪が飛んで来てなかなか寒かつた。途中の岩上から見た両神山から三宝、甲武信、木賊、国師、金峯への秩父の尤物のパノラマは見ものであつた。

二十六日は沼井、原田の両君と金山から信州峠を越へ御所平へ出たが此日も天候に恵まれ、南アルプスの遠望、昨日登つた小川山と金峯、瑞牆の眺望など楽しかつた山行であつた。

昨年の碑前祭には沼井さんと金峯に登り、翌日は富沢君の案内で大日小舎から今回も通つた八町平の密林を通り瑞牆山を東尾根から登つたが此時も上天気で、足下から咲く可憐な花の群落を除けて、歩くかと思ふと岩峯上に出るといふ一寸得難い路であつた。

これも碑前祭に参加した御蔭で、ウェストン祭も結構であるが、日本の山の先達の一人であつた木暮さんの碑前祭にも、もつと大勢参加して貰いたいと思う。

塩見岳

望月達夫

一月の休みに神流川上流の二子山付近をぶらぶらし、十石峠を信州へ越えたときは、僅か二人の登山者と一緒になつたきりで、最近の山の雑とからはまつたく隔絶されたので、五月三十一日の連休にもどこか静かな処をと考えていたが、たまに少し高い山へも登りたくなつたので、三日間で行つて来られて、余りこみそうもない三千メートルの山はどうかとさがした末、塩見岳を選びだした。はじめの計画ではコモリ岳をかけた大井川西俣へ下るつもりだったが、四日は朝のうち天気が悪るかつたので、三伏小舎から往復し翌日往路通り鹿塩へ下つた。五日は午前中より通るような快晴で、遠近の山々の眺望にめぐまれたが、とりわけ三伏峠から南沢へ下る尾根の途中から眺めた仙丈岳は、実にすつきりした姿で、足をとめてしばし見とれたほどだつた。それと伊那の里の新緑の彼方に、絢爛たる姿の残雪の木曾駒連峰はいつまで見ていても飽きない眺めだつた。幸い三伏小舎も四十名程度で連休三日の山としては、静かな方だつたと言えるだろう。

身体障害者と

富士登山して

熊谷とも子

全国身体障害者連合会の主催の富士登山にふとした機会から事実上のリーダーとして百名近い障害者と富士七合目まで行つてまいりました。戦争によつて両足、また

は片足を切断された方、片腕をなくされた方、その他に小児マヒで身体を自由を失われた方や、七十以上のお年寄四人、聾啞の方はかり、始めはこの方々が登頂出来るのかもしれない。登頂出来ないにしてもどの程度で歩いたらいいのかしらと、大へん不安でございました。

五合目からいよいよ歩き出してみまして、皆案外よく上手に歩かれますのにびっくりすると同時にほつと致しました。

たとえ義足であつても、片腕がなくても、小児マヒで身体が不自由であつても、富士山へ登る事が出来るということは、その人の将来にどんなにか大きな影響を与えることでしょう。

私はこの企画は大へんよいことだと思ひました。身体障害者に身体についての自信を与えるということによつて、ある意味においての劣等感はなくなら希望をもたれることと思います。せつかくの企画でしたが、折からの大風の祟で山が荒れ出しましたので七合目で一泊して、後髪をひかれる思いで下山して参りました。来年こそはお天気に恵まれて、全員登頂させて上げたいと思ひます。

(七月二十一日)

深田隊歓迎会 シュガール・ヒマール、ランタン・ヒマールの探查を終えて帰国した深田久弥氏一行の歓迎会は八月十一日協和会館で開いた。

田口二郎氏帰国放談会 印度から二週間の予定で帰国した田口氏を囲む放談会を八月八日三井クラブで開いた。

図書紹介

雑誌 今アル プ

去る三月創刊された本誌は号を重ねること三回、山の好きな人々や山の本の好きな人々の間にほほ知れわたつたようだ。創刊号の編集後記をみると「雪線近いその草原が、人の住む町の賑わいから遠く静まっているように、「アルプ」もいわゆる雑誌の華かさや、それに伴う種類の刺激性などからは距つたものだといえるし、おのずから願っている方向も決まっている」と書かれていのように、現在ある他の山岳雑誌とは全く違つたいき方をしている。戦前、梓書房がやっていた「山」というきれいな雑誌にやや似ているといえないだろうか。

内容は今までのところそれぞれに良いものだが、変化にはややとぼしい。表紙、紙質、組み方、刷り、原色板、写真板(例えば片面アートの使用)とじ方など、いわゆる造本の点はすべてがまことに心にくいまでのすつきりした出来栄えて、編集者と発行者との気心がうまく一致し、細かい注意が隔々まで行き届いている感じをうける。何冊かたまたま製本でもして、永く愛蔵するに値するだろう。

二、三注文をつけると、第一は執筆者の顔振れが固定しないようにということだ。三号までを通覧すると、その危惧が幾分感じられないでもない。時事めいたものにこだわる必要はないが、矢張り月刊雑誌なのだから、そうした配慮

も時に応じてほしいというのがその二。山の本や映画などの批評、感想などが書かれる頁もあつたらと思う。またゆくゆくは本誌にふさわしい翻訳ものも載せたらどうだろうか。

毎号原色版一、写真三(但し一号は写真二)が入っている。写真では今までのところ取りたてて傑作というものはないが、三号の「安曇野の春」と「冬の消える日」はいい。原色版の方は二号の「山男」(畦地氏)が奇妙にひきつけるものをもつた作である。毎号豊富に使われているカットも悪くない。昔から良心的な雑誌は商売としては続かないというのが、日本での常識のようだし、梓の「山」も五年とは続かなかつたと記憶する。幸いなことに本誌は、創刊号を三刷、第二号を増刷したと聞くので出だしはきわめてよろこばしい状況と言えよう。永い生命を期待すること切である。(A5版六十八頁、編集者三宅修、創文社発行、定価八〇円)(望月達夫)

初恋の山

川森左智子著

二十年前あまり山にとり憑かれ憧れと夢を氷河の山に賭けたひとりの平凡な主婦がフランスの山友達に招かれて、たつた一人でヨーロッパの山々に出かけたその紀行を中心にまとめあげられたもの。

シャモニーに遊びついでスイスに向いあこがれのマッターホルンに登る。パーティは今井友之助氏とただ二人だけ、ガイドレスのためマッターホルン・ホテルで宿泊

を断られるくだりなど現在の観光地としてのスイスのやりかたがうかがわれて興味深い。再びシャモニーに戻り初恋の山モンブランに登頂する。たんなる登頂記というのではなく、その間におけるフランスの山仲間との交歓が楽しく画かれていのは読んでいても気が持がよい。日本の女性登山者としてマッターホルンやモンブランの登山は最初の記録でそうした面からも一読の価値がある。終りの旅の味フランスの章は、色々と馳走の話が随筆風にするされていて楽しい。巻末にアルプス旅日記がそえられてある。

昭和卅三年七月平凡出版社刊、二六七頁、原色写真五葉、二八〇円 (山崎安治)

白嶺

II コルディイェ
ラ・プランカ

J・コガン著
N・レイナンジェ著
近藤 等訳

美しいペルーの山について、日本に紹介された最初のものといつてよい。一九五一年フランスとベルギー合同登山隊によるコルディイェラ・プランカ山群登山の報告書である。ただし報告書といつてもフランス人の書いたものだから多分に散文的で、その点喰ひたりないのはやむを得ないが、ヒマラヤ以外にもまだ六千米級の未踏峰がいくつに残されているということを知り得るだけでも、われわれにとつてよい勉強になる。

第一部をジョルジュ・コガン、第二部をニコール・レイナンジェ

が書いており、七月十二日クロ・コガン、ジャック・コガン、モリス・ルノアル、レイモン・レイナンジェの四名によるネヴァード・ピスコ(六〇〇〇米)、八月十三日ルノアル、レイモン・レイナンジェ、ジョルジュ・コガン、ジョンジャンの四名によるネヴァード・アルパマヨ(六六〇〇米)の二つの初登頂、八月下旬(何日だか不明)キタラフ(六一〇〇米)にはニコールとクロードの二人の女性だけのロブド・パーティで登つている。ペルーの最高峰ウアスカラン(六七六八米)はアルプス流の攻撃を試みてまふと失敗しているが、こうしたところはフランス人の山登りというものは大変甘すぎるようだ。

ともあれペルーの山というのはアプロチが非常に短かく、入国も簡単なようなので、大いに食指をそえられるところである。

昭和三十三年五月講談社発行、二二三頁、地図、写真多数、二八〇円 (山崎安治)

追悼

白馬鍾ヶ岳遭難報告

明 大山岳部
千葉大山岳部

昭和三十三年三月白馬鍾ヶ岳で惹起された明大および千葉大山岳部の遭難報告書である。内容は追悼、報告、および付記の三部からなり特に第三者にとつて貴重なのは第二部の遭難報告で、本書の重点ももちろんここに置かれ、約百頁を費して、遭難事情、捜索経過、遺体状況、雪崩に関する考察の各項にわけてくわしく述べられている。

特にこの遭難事故は、二重遭難、くわしくいえば三重遭難であり、しかも救援におもむいた他パーティからも犠牲者を出しているという特異なケースだつただけに、当事者の苦勞というものは並々ならぬものがあつたことと拝察する。

しかもこの二重遭難の原因というものが、まだ上の雪洞にも仲間が生きているという前提のうちに救助を強行して新雪雪崩にやられたものだけに、なかなかデリケートな問題を含んでいる。「僕はここで登山の危険と困難について語ろうとは思わない。ましてやリリーダーがあえて危険を冒そうとする時の一般論を述べようとは思わない。むしろその逆で、手放して彼らの暴走馮河の勇にも等しい行為をたたえたいと思つている。誤ちかもしれない。しかし彼らの勇気は後世に残されるべき美しい友情にあふれたものであることを銘記したいからである。彼らは危険をさける理性より、救援を待つ一人の仲間のために安全の美名につかれることをいさぎよしとしなかつたのである。」と大塚博美氏は救援隊のリリーダーとして死去した後輩の死について述べている。これが今度の二重遭難について何よりも強くその真相をつたえている言葉であるように思う。遭難報告書として昔の東大の「剣沢に近ける人々」や、日大の「冬富士遭難報告」などとともには後世に残るものであろう。

昭和三十三年三月明大、千葉大山岳部発行、二六一頁、カラー写真一葉、写真十四葉、頒価五百円 (山崎安治)

山に還る

F・ロッシュ著
近藤 等訳

同じ著者および訳者による「青春の氷河」(三笠書房刊)の続編である。プロログがすこしこたごたして若干とつきにくい、が、第二部あたりから次第に興味が深くなってくる。「青春の氷河」の主人公ジャンに代つてその妻ブリジットが本書ではヒロインとして登場する。シャモニの名ガイドとしてうたわれたジャンが氷河の大クレヴァスに落ちて死にブリジットは未亡人として残される。ジャンの葬式の日パリからかけつたブリジットの両親男爵は彼女をパリにつれ戻そうとするが、彼女はそれをきつぱりことわつた。両親からの経済的援助もなくなつたが、ジャンと共に住んでいた山荘を売りはらつてブリジットはシャモニで暮す決心を固めた。彼女はすでに亡き夫との愛の結晶を身ごもつていたのである。しかし土地の人の彼女にそがれる眼は全く冷かつた。ジャンの死んだ原因が彼女との不和にあると皆に思われていたからである。しかもまた彼女は生活と戦わなければならなかつた。子供をあづけて看護婦観光業者の事務員、さらに山小屋の管理人として苦難の生活がつづく。そしてある日グラント・ジョラスの大岩壁に取着的な無鉄砲な二人のドイツ人を救うため、彼女は素晴らしい働きをみせた。もはや彼女に冷い素顔をみせる土地の人はたれ一人いなくなつた。ブリジ

ットはついに愛する夫のねむる山に還つたのである。この風雪の大岩壁を舞台とした救助行を中心としてロッシュの筆は一段と冴えそのクライマックスをもり上げていく。異色作といえる。

昭和三十三年五月白水社発行、二五六頁、三四〇円

(山崎安治)

穂高星夜

山崎 安治著

本書は第一部山と人、第二部雪山の記録、第三部登山史ノートの三部からなつてゐるが、第三部が半ばを占めるので、書名から受けるなにか詩的な感じとは内容がややそぐわない。

第一部には「世界の山」の標題のもとに欧州アルプスにおける近代登山の芽生えから、最近のヒマラヤ登山までが要領よく語られてゐるほかに、なお二篇が含まれてゐるが、それらのなかでは「英国山岳会の歴史と伝統」が面白い。第二部のなかでは、厳冬期鹿島槍北壁の完登と、積雪期剣岳池の谷尾根の二篇を特に記しておきたい。元来未発表の登山記録を求めこれを活字にしておくことは、その簡単にはいかならず、なかなか辛抱のいる仕事である。この二篇は失われようとする初登攀の記録を著者の努力で見事に定着させたもので、その点に価値があるといえよう。

第三部は本書のなかで最も注目されてよい部分である。「穂高岳の早期登山者」の題下に、日本の近代登山とは不可分の関係にある

穂高の早期登山史を述べたものが中心だが、従来これだけにまとめられたものがなかつただけに、著者の労を、多ししなければならぬ。また諸文献を丹念にしらべた結果、槍の北鎌尾根の初登攀は一九一二年、ウェストン師によつてなされたこと論証している点なども注目されねばならない。最後に早大山岳部の歴史が約五十頁にわたつて述べられてゐるが、このなかにも当然日本の近代登山史の側面を見ることが出来る。

著者は「日本では、アルプスやヒマラヤの登山史に関する研究には、まことに優れたものがあるが、肝心の北アルプス関係のものでは殆どみるべきものがない」と歎じ、「穂高なり、剣なり、一応まとまつた正確な登山史を知りたい」と望んで、偶々著者が一年半の病院生活をのした折に渉猟した諸文献からのメモをもとにして、本書の第三部を書き上げたのである。

登山史をまとめるというように地道な仕事は、こうしたことに興味がなくは到底できる訳がない。また、そういう人もそう多くいるとは思われない。したがつてこの著者にさらに剣とか、或は北アルプス全体の登山史をまとめるような折つてやまない。と同時にこうした労作が多くの若い登山者に読まれることを望みたい。

巻頭に挿入の写真八葉は、どれも珍らしい貴重なもので、本書を飾るのに適したものと思う。

新四六版三〇二頁、昭和三十三年六月 明文堂発行 二八〇円

(望月達夫)

東京支部役員

支部長松方三郎、理事長野田三郎、委員星野重、安彦六郎、坂倉登喜子、鳴原啓祐、福住修治、増田昌司、飯島貞二、戸野昭、藤平正夫、大塚博美、三枝礼子、中島伊平、大野栄二、関口敏、監事石原憲治、山下一夫、評議員神谷恭沼倉寛二郎、折井健一、村井米子川森左智子、太田敬、金坂一郎、今井喜美子

東京支部集會予定 九月三日理事會、九月十七日新人懇談會、九月二十五日婦人の集い、十月一日理事会、十月十五日理事會、十月二十三日婦人の集い。新人懇談會は九月十七日午後六時半から本会ルーム、多数新人の参集を希望します。

九月の懇親山行計画 △場所吾妻安達尾線走、または鳥海山方面

▽期日九月二十一日(一)二十三日、

▽期日九月二十日(夜行)、マリーダ

1東京支部理事二名、▽詳細は山岳会ルーム、または中島伊平(電話二八〇一一一東京ガスカ)へ

夏山相談所報告 六月十日から十五日まで日本橋白木屋で開催した。ここでは裝備の相談を主とし、引つづき六月二十日から七月十日まで毎週金、土、日、渋谷東横百貨店で夏山相談所を開いた。なお七月十九日午後二時から東横百貨店で山の座談会を行い、野田三郎、安彦六郎、三枝礼子の三名が出席、登山用具、登山用品の応対などについて語つた。

新入会員

四七〇〇 千葉 桃八 秋田県秋田市中鷹匠町五〇(荒巻広政、福田文二)

四七〇一 栗山小八郎 秋田県小坂町古館二五(荒巻広政、福田文二)

四七〇二 吉田 薫 東京都世田谷区北沢町四ノ四一六(藤木九三、片山全平)

四七〇三 塩見 節夫 東京都中央区日本橋江戸橋二芝川商店内(藤木九三、片山全平)

四七〇四 木村 良子 東京都墨田区菊川町一ノ一九(川崎精雄山下一夫)

四七〇五 寺谷 昌恭 東京都文京区駒込神明町三八七(村木潤次郎、鳴原啓祐)

四七〇六 岡部 一彦 藤沢市鶴沼五二一八(山崎安治、浜野正男)

四七〇七 和田 晴光 東京都中野区江戸田一ノ二三〇(曾根方(藤木九三、川崎隆章)

四七〇八 和田 基治 東京都杉並区永福町三三九(藤木九三、川崎隆章)

(三頁よりつづく)
毒もあり、何んだか悪いことをしてゐるようでもあつたが、これは当時としては当たり前のことであり、何の不思議でもなかつた。高頭君の家は、廻りに堀を廻らしたお寺のような家であつた。何十年とか百年とか経つた家であるためと冬の雪の重さで、雨漏りがするのが悩んで、「一生に雨の漏らない家に住みたいが」というのが当時高頭君の嘆声であつた。

私の今の住いも、三十余年経つて、戦後雨漏りで困ると、高頭君の大きな家構いのことを思い出してゐる。高頭君ともとうとう御別れとなつた。

会務報告

昭和卅二年度収支決算

(33・3・31)

収入の部（単位円）		
科目	予算金額	決算金額
經常収入	九六、〇〇〇	一、〇三、七〇〇
入会金	五〇、〇〇〇	五〇、〇〇〇
会費（東京）	三六、〇〇〇	—
〃（地方）	三六、〇〇〇	七六、〇〇〇
旧会費	二〇、〇〇〇	二六、五〇〇
次年度会費	—	五、四〇〇
事業収益	三〇、〇〇〇	六三、九六〇
会報広告料	一〇、〇〇〇	三六、〇〇〇
山岳広告料	一〇、〇〇〇	三六、〇〇〇
山日記勘定	一〇、〇〇〇	一六、〇〇〇
会員章売上	五、〇〇〇	五、〇〇〇
山岳売上	四、〇〇〇	四、〇〇〇
貸室料	一〇、〇〇〇	一四、七〇〇
寄附金	—	四、六〇〇
利息	—	一四、六六〇
雑収入	—	一四、七九〇
計	一、一四四、〇〇〇	一、二六六、六六〇
支出の部（単位円）		
科目	予算金額	決算金額
事務費	四六、〇〇〇	四七、五〇〇
俸給手当	一六、〇〇〇	一五、〇〇〇
文具費	二、〇〇〇	一、九〇〇
印刷費	七、〇〇〇	一、八五〇
通信費	一五、〇〇〇	一三、九八〇
交通費	七、〇〇〇	一、六七〇
管理費	—	一、六七〇
諸 税	五、〇〇〇	三、〇〇〇
火災保険料	一〇、〇〇〇	一〇、〇〇〇
営繕費	一〇、〇〇〇	一、三三〇
光熱費	三、〇〇〇	三、四六〇
電話料	三、〇〇〇	五、〇九八
消耗品費	五、〇〇〇	四、六六九

減価償却費	—	一、二六、〇四〇
事業費	五九、〇〇〇	四六、三三〇
會議費	九、〇〇〇	一六、九三〇
謝礼交際費	一〇、〇〇〇	一〇、〇〇〇
會報出版費	一四、〇〇〇	一〇、〇〇〇
図書費	一〇、〇〇〇	五、〇〇〇
山岳出版費	一〇、〇〇〇	一六、九三〇
組合費	一五、〇〇〇	一六、〇〇〇
指導費	三、〇〇〇	一三、八五〇
調査研究費	一〇、〇〇〇	—
備品費	一〇、〇〇〇	一三、二〇〇
振替手数料	—	一、〇八〇
支部還付金	—	二一、〇五五
予備費	一、〇〇〇	三、三三〇
基金	五、〇〇〇	一、〇〇〇
雜費	一五、〇〇〇	一七、五五〇
計	一、二四四、〇〇〇	一、二六六、六六〇
剰余金	—	四六、三三〇
合計	—	一、二六六、六六〇

貸借対照表(33・3・31)			
資産ノ部	負債ノ部		
(単位円)			
建物	七六、〇〇〇	基金	三三、二五五
什器備品	三三、〇〇〇	積立金	—
図書	五九、〇〇〇	引当金	一、四〇一、二八〇
有価証券	六〇、〇〇〇	遭難対策基金	三、〇〇〇
銀行預金	五九、〇〇〇	振替貯金	三六、〇〇〇
振替貯金	三六、〇〇〇	金銭信託	一〇、〇〇〇
金銭信託	一〇、〇〇〇	図書基金	—
未収入金	七、〇〇〇		
現金	一三、〇五五	未払金	五、四四五
合計	二、七三三、五五五		二、七三三、五五五

財産目録は貸借対照表に同じ。	
社団法人日本山岳会昭和三十三年度収支決算書、同貸借対照表	
財産目録につき監査致しましたところ、その正確なることを認	
承致します。	
昭和三十三年三月三十一日	
会計監事	石原 憲治
同	諸岡 一次

四月理事会 廿五日(金)

場所 本会図書室

出席者 日高副会長、理事折井、

太田、辰沼、山崎、村木、松丸、

越智、田島、徳久、田村、大塚、

石坂、前理事金坂、評議員成瀬

監事野口、前監事石原

マ議事および報告

一、理事事務分掌の件、常務理事

は折井、浜野、辰沼、山崎、太田、

村木の六名に決定、事務分担任は次

のとおり。総務渉外(折井、越智)、

経理(太田)、編集(山崎)会報、

田島、山岳、徳久、山日記、団体

(浜野)、研究(辰沼、田村)、遭

難対策(浜野、羽鳥)、図書集(松

丸、松田)、学生部(村木、石坂、

松沢)、支部(日高、太田)、兼東

京支部(野田、大塚)

二、山岳五十三年の件、田島理事

を責任者とし金坂、望月、山崎の

三氏に補佐を依頼する。

三、会報発行の件

四、南極観測隊帰国歓迎会の件

五、第十二回ウェストン祭の件

六、国体委員を浜野、金坂、村木、

折井、若林(富山)に依頼する。

五月役員総会 十二日(月)

場所 本会図書室

出席者 日高副会長、理事浜野

太田、辰沼、山崎、村木、松丸

徳久、田村、石坂、松田、松沢

評議員望月、成瀬、交野、監事

野口

マ議事および報告

一、評議員推薦の件、岩永信雄、

小原勝郎両氏を推薦、現評議員の

任期と合せ昭和三十四年度までと

二、マナスル登山報告書「マナスル」は毎日新聞社から五月二十日に発行される。

三、竹沢長衛翁(南アルプスの開拓者)記念碑建立協賛の件、長野県上伊那郡美和村々長伊藤修治氏より依頼あり、原則として承諾するが、一応信濃支部の意見なども聞いた上正式決定する。

四、ヒマルチュリ会の件、五月七日海外登山審議委員会を開き隊長の選定は日高、松方副会長および指名賛会員の三氏に一任。実際の準備はヒマルチュリ登山委員会を作り、会の日常事務に支障のないようにする。

五、富士を愛する会協賛の件、富士宮市に今回結成された同会より富士の浄化運動のため本会の協賛を得たきむね申出あり、静岡支部とも連絡の上許可したい。

六、アジア大会にネパール選手団来日の件。

第一回ヒマルチ

ユリ登山委員会

第一回ヒマルチュリ登山委員会は六月十二日本会ルームで開催した。

出席者 小原、成瀬、折井、辰沼、金坂、村木、松田、石坂、日下田

マ議題

一、ヒマルチュリ登山委員会の名称は今後社団法人日本山岳会ヒマラーヤ登山準備委員会と統一する。

一、委員会の事務所を先遣隊派遣準備期間中は本会ルーム二階に置く、したがって以後ルーム二階は一般の使用を禁止する。なお本隊

の準備期間中は独立した事務所を考慮する。

一、各委員の任務分担を次のとおり決定、ただし各セクションとも増員、変更あるものとする。

委員長 日高信六郎、副委員長 小原勝郎、経理渉外委員 成瀬岩雄、対毎日新聞連絡委員 竹節作太、対山岳会連絡委員 折井健一、実行委員 松田雄一、整備金坂一郎、大塚博美、食糧石坂昭二、日下田実、医療、酸素辰沼吉広

一、隊長の人は十月一日ごろとし、それまでは日高委員長が責任者となる。本隊員は隊長決定後隊長により選考される。

一、隊の方針、ネパール政府の許可は今秋の偵察および来年プレ・モンズーンの本隊の二季にわたり得られている。またヒマルチュリの決定的登路が確定していないので、当初の方針どおり今秋最少限二名の先遣隊を派遣し、主として東北面の谷より登路を偵察しなるべく早く帰国する。

一、先遣隊員は金坂一郎(隊長)石坂昭二の二名を推薦する。

六月役員総会 十七日(火)

場所 本会図書室

出席者 別宮会長、松方副会長、理事折井、山崎、村木、田島、石坂、松沢、徳久、田村、越智、浜野、辰沼、松田、大塚、監事諸岡、評議員入沢、小原、望月、前監事石原、ヒマラーヤ登山委員金坂

マ議事および報告

一、ヒマルチュリ登山準備の件名称をヒマラーヤ登山準備委員会と変更する。先遣隊として金坂一郎

石坂昭二郎の二名を決定、新聞に発表した。
(小原)

二、山岳五十二年および五十三年の件、五十二年は大分遅れたが六月中旬に初校のゲラが出てくる。写真はグラビアにする。(山崎)
五十三年は引つづき内容を決定し目下準備中である。(田島)

三、竹沢長兵衛記念碑の件は本会共賛とする。

四、ルーム改築の件、石原博士と浜野理事に一任する。

五、台湾山岳会来日の件、明年台湾山岳会員約十名来日の予定につき本会にアプリケーションを求めてきた。資金面では援助出来兼ねるが、これをはつきりすれば歓迎したい。

七月役員総会 十七日(水)

場所 本会図書室

出席者 別宮会長、日高、松方副会長、理事折井、太田、浜野大塚、松丸、田村、松田、徳久山崎、辰沼、越智、石坂、監事野口、評議員渡辺、藤木

マ議事および報告

一、法人登記の件 日高氏の承認をうけてから文部省に登記をする

二、山日記の件、十二月発行を目標に準備を進めている。

三、ヒマルチュリ先遣隊の件、四月十八日附でネパール政府から、五項目条件づきの入国許可があり

た。シエルパはガルトツェン、ほかり一名はこちでセレクトする。六月十二日ヒマルチュリ準備委員会

で先遣隊員決定、梱包は六月五、六日完了、九日船積した。先遣隊員は六月十二日金坂一郎、石坂昭

二郎両氏と決定、六月十八日ハトで東京発、六月二十日神戸出帆、十一月はじめ偵察の結果が判明するはず。本隊は八月上旬から準備を始める。十月下旬隊員を決定。出発明三十四年一月下旬、先発二名を出す。本隊は二月二十日サン

ゴラ号の予定、登頂は五月上旬、帰国は七月下旬、先遣隊の予算約百五十万円(外貨三千ドル)本隊と全部で八百万の予定。

四、厚生省主催講演会の件、七月十六日午後一時から三越で厚生省主催の遭難対策講演会座談会が開かれた。七月二十日NHKで放送する。

第一八二回小集會 六月十八日午後六時から体協会議室で篠田軍治氏の米国の山の話があつた。

第一八三回小集會 六月二十六日午後六時から体協会議室で別宮貞俊氏のインド、ネパール旅行談があつた。

南極観測隊員歓迎会 四月二十八日元気に帰国した南極観測隊西堀栄三郎氏以下の歓迎会は体協二階会議室で五月二十九日午後六時半から開催、別宮会長以下会員多数出席し盛会であつた。

アフリカ探検隊帰国歓迎会 アフリカ大陸を東から西へ自動車で横断、アフリカ大陸の最高峰キリマンジャロおよびマウエンジ登頂

を行った早大アフリカ探検隊の帰国歓迎会は五月十九日午後六時半からルームで開かれた。関根吉郎

吉阪隆正、後藤重子、鈴木耿子の四氏が出席、種々アフリカ大陸の珍らしい話題を中心に懇談した。なお関根、吉阪両氏撮影になるスライドが上映された。

チリ山岳会より記念品 六月四日、神戸大学パタゴニア遠征隊長田中薫氏の帰国に際し、チリ山岳会々長より、日本山岳会へ日

智合同登山の記念として、銅製華麗な「掛皿」の寄贈を受けた。

寄附金 会員富田治三郎氏より金千二百円が寄附された。

物品寄贈 本会テラス用机二脚

長椅子六脚が会員松本熊次郎氏より寄贈された。

関西支部報告

支部総会 五月二十一日午後六時から朝日新聞大阪本社第一会議室で開催され、一九五七年度事業報告、会計報告がなされ、一九五八年度新役員が選出されました。また高木正孝氏のパタゴニア登山隊の講演がありました。

新役員の業務分担は次の通り
マ支部長津田周二、マ委員(常務)田中栄蔵、今西寿雄(文書)水野政博、岸田権二、津田康祐、梶本徳次郎(会計)森本嘉一、吉田義則(図書)中尾正武、三沢一三、田淵邦彦(支部報)大島輝夫、阿部和行、山本光三(会報連絡)大木保太郎(学生)尾藤昭二、前田光雄、古森金蔵、住吉仙也、荻野昌宏(地区連絡)大阪梶本徳次郎、神戸片山英一、三宅康市、京都小谷隆一(監事)仲西政一郎、二本信次

な最近の関西支部行事及び行事予定は次の通り
マ小集會 五月二十三日「南極越冬の話」西堀栄三郎氏。映画「ペンギンの国」

マ研究会 五月十四日「登山における医学知識」尾藤昭二氏、六月

十一日「最近の合成繊維」新保正樹氏

ウェストン祭

第十二回ウェストン祭は信濃支部の主催で六月十四日午後二時から例により、ウェストン碑前で開催された。本年は五月のゴールデンウィークから上高地にバスが開通したために、引続き登山者も絶えることもなく、いわゆる夏山シーズンが長くなつたので、昨年より期日を繰上げたとのこと。小里頼忠氏の司会にて

マ開会の辞、高山信濃支部長、祝辞、安曇村長、松本市長代理に引続き、渡辺評議員の挨拶、ウェストン著「日本アルプス」の訳者岡村精一氏のウェストンを讀めるの辞、尾崎喜八氏の講演並びに別項の新作詩の朗読等

参加者に多くの感銘を与えて、碑前祭を閉じた。

山梨から三井支部長、石塚氏、静岡支部から塩田、三沢氏、尾崎高山阿氏の夫人等、多彩な顔ぶれ二三〇余名の参加者があつたが、常連の藤木九三、村井米子氏等の顔が見えないのはちよと淋しかった。

同夜は温泉ホテルの広間に、坂倉女史の名司会で懇談会が開催され、ウェストン祭の運営、各支部から本部に対する種々の要望等、活潑な発言があり、山岳会のあり方についての熱意を聞かれたことは有益であつた。

翌十五日は、上高地散策、西穂高岳登山等楽しいプランを信濃支部の方々の御世話で行事の中に折り込まれ、六月には珍しい天候

に恵まれた二日間、新緑の上高地を満喫して解散した。
(折井・太田)



**NYLON
TENT**

SKI & MOUNTAIN
GOODS

SUDACHO. KANDA. TEL (25) 6428

編集後記 本号は一九八、一九九号を合わせた合併号とした。次号はいよいよ二百号である。紀行、随想、研究、書評、なんでもどしどし御寄稿をこう次第。(山崎)

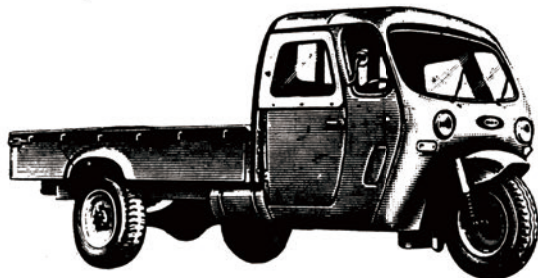
昭和三十三年八月廿五日発行

東京 都千代田区
神田 駿河台四ノ六

発行所 社団法人 日本山岳会
編集者 山崎 安治

頒価二十円
電話神田(25)八九五二番
振替口座東京四八二九番
印刷所 株式会社 技報堂
東京都港区赤坂溜池五番地

ゆったりした 3 人掛の運転席



乗用車と間違わないで下さい。3 輪車でこんなにゆったりしているのです。しかも軽い丸ハンドルですから、長距離輸送でも疲れません。

- アンダーフロアエンジン
- オーバーヘッドバルブ
- A B 型 2 屯積

他に 1 屯車の決定版とご好評を頂いております TR 型がございます。

山なら絶対!!

オリエント

Hino 日野ディーゼル

も寄りの地区販売会社でご用命をお待ちしております